

奈良高専 図書館だより

No. 7

記事

1. 巻頭言、偉人の伝記を読み
2. 本、
3. 司馬遼太郎の面白さ
4. 本との出会い
5. ゆとりが欲しい
6. 新着図書案内

1980年10月 奈良工業高等専門学校 発行

偉人の伝記を読み

図書館委員会委員長 石川光二

トルストイは、その著書「芸術とは何か」（岩波文庫、河野訳）の中で、芸術品に不可欠な要素として、新しさ・誠実さ・明快さの三つを挙げている。これを科学論文に不可欠な要素とは何かに置きかえても、上述の三つの要素はピッタリである。つまり、「もの考え方」というものには文科的、理科的というふうな区別はないはずである。高専のような理工系の学校では、文科系の学生との会話がなくて、ともすれば考え方が理科的に偏りやすい。それで、つとめて文科的な本を読むことが大切であると考えます。

学生時代に、「芭蕉研究」のゼミに参加したことがあった。その講義と討論の内容は、芭蕉が、いつどこで、誰を訪ねたとき、その句を読み、この句が気に入らず後でどう変えたとか、解釈はこうであるがこの箇所にこんな異説があるというふうなものであった。そして、芭蕉の句を知れば知るほど、彼は何を考え、どう生きたかという感慨がひしひしと迫ってくるのである。つまり、文学というものは、それがたとえ架空の小説であったとしても、著者がその作品を通じて読者に何かを語りかけているのであり、その受けとり方も若い人と老人とではずいぶん違ってくるはずである。この意味では、若いときに、偉人と呼ばれるような人々の伝記を読んでみるのが大切である。もちろん、理工学関係の偉大な先輩の伝記を読むことも大切であるが、文科的、理科的というふうな色眼鏡で偉人を区

別するのはおかしいのであり、これらの人々の間には必ず共通した何かがあり、それを学び、身につけることが偉人に近づくことのできる一番の近道ではないかと考える次第である。また、ある先生からベートーベンの伝記（岩波文庫、ロマン・ローラン著、「ベートーベンの生涯 片山訳」）を読みと言われた。ベートーベンは晩年耳がほとんど聞えなくなったが、それにもかかわらず第九交響曲をつくった。彼は晩年には、棒をくわえて、その棒の先をピアノのボディにあてて、自分のひく音をきいた。彼は歯できいたのである（岩波新書、長谷川著、ベートーベン）。そこに彼の偉大さと苦悩を乗り越える不屈の精神力があるからであると先生は言われた。

ヤスパースが十二回にわけて哲学の講演をした演題の一つに「哲学の無用性」というのがある。人間は何故生きていかなければならないかということを実際に考えるのが、「哲学する」ことらしい。しかし、それをどんなに考えてみても、その人の人生には何の役にも立たない。しかし、人間はそれでも哲学しなければならないというのである。人間としてどのように生きるかということを考えるには、私達の偉大な先輩がどのように生きたかを知ることが大切ではないだろうか。つまり、偉人の伝記を読んでみることである。

“本”

化学工学科講師 大植 正敏

何百年という昔から人を魅了してやまないものがある。ひとたび良い本にめぐり逢えば、人は食べることも、寝ることも忘れその世界に遊ぶことになる。最近のように印刷物が氾濫する時代になっても、やはり良いものは多くの人をひきつけて離さない。

私は、戦記物が好きである。学生時代に歴史の時間に習った秀吉が家康が、将門や清正や、そしてネネが淀君が書物の中で生き生きと生命を持つのである。私の目の前で笑い泣き作戦を練る。私はいつしか彼等と共に考え生きようとしている。彼等は、彼女等は、真赤な血の通った人間として現代に存在する。一冊の本を読み終えた後、彼等の生きざまに感動し、しばらくの間は現代に戻るのを忘れる。私はこうした過去の人物を主人公とした本、いわゆる歴史小説が好きであるが、他に推理小説が好きだと云う人もあるだろうし、純文学、専門書類を特に愛読するという諸氏もあろう。みなそれぞれ本と一体化し、作者と、そして作中人物と一体化して満足を得ているのだと思う。漫画類にしても熱中する人達がいるからには、それなりに良いのに違いない。私はあまり漫画を読まない方だから、はっきりわからないが、愛読者は作中の王子様、女王様の心境で何時間が過すに違いない。主人公になり、主人公を夢見ることににおいては、漫画といえども私の愛読する歴史小説と五十歩百歩であろう。

とにかく本というものは良い。本を読むことによって、己のおろかさを知ることであろうし、己の心の狭さに愕然とすることもあろう。立派な人物を読み終えた後には、特に自分を反省することしきりである。この現代の印刷物氾濫の時代に、我々は良書を手に入れ、一つの伝達物として、また人生訓としてこれらを利用し、少しでも己の役に立ち、また己を高めることになれば、書物というものは立派な人生教師だといえることになりはしないだろうか。

司馬遼太郎の面白さ

一般教科助教授 北川誠之助

「講釈師、見てきたような、うそを言い。」という、ひやかしの一句があるが、司馬遼太郎の時代小説は、作者の知識の博さと、豊かな想像力により、読むものをして講釈師のうそ以上のうその世界に酔わせる。特に、日露戦争に題材を取った一連の作品とその集大成

とも云える「坂の上の雲」は、時代が近いだけに、より一層の面白みがある。

「坂の上の雲」は、松山の貧乏士族の家に生れた秋山好古、真之兄弟について書かれている。兄は、騎兵創設者として、弟は、「天気晴朗なれど波高し」などの名文を残した海軍の参謀として成長してゆくさまを縦糸に、また、せきついカリエスで、寝たきりとなりながらも和歌の革新に、短い一生を燃焼させた真之の幼馴染、正岡子規と真之の交友を横糸に、誕生間もない近代日本が坂の上の雲を目指し、一生懸命坂を登って行く様子を描いている。

明治十年頃、陸軍は、プロシヤにならい、参謀養成に着手した。参謀の卵として集められたものだから、当時としては、指折りの秀才を集めたはずだが、鉄の舟が浮くはずがないと言って、プロシヤ人の教官にくってかかった者もいるというから、当時の科学技術の水準が、解るというものである。(その後)三十年、必死で近代化を行い、途中、清国と戦って、勝利を収め、日本は、極東の大国として成長して行く。

坂の上を登りつめた日本は、ロシアと戦端を開く。日本が、西欧列強との最初の戦争である。作者は、乃木希典の旅順攻略に多くのページを割く。

ただ、日清戦争に成功したという固定観念から、卵を岩へぶつけるように、セメントと鉄で固められた要塞に繰り返し繰り返し抜刀隊を送りこみ、それも、総攻撃の日は、末広がりで八の日を選ぶなど、工夫のない繰り返しを行い、ロシア側は、機関銃で待って戦死者の山を築くという、軍人の思考の硬直性を書く。旅順は結局、上級司令部の介入で、攻略に成功する。乃木は、戦死者の余りの多きに、精神主義的なものにのめりこんでゆき、武士道の精神を実行する。外国の従軍特派員は、多くの心酔者を生み、旅順における損害の大きさが、米英両国における戦費調達に障害となることを恐れた政府首脳と、陸軍内部の長州閥の庇護が、指揮者の責任を不問にする。

日露戦争が終って、太平洋戦争が敗戦となるまで、約四十年間、山本五十六をはじめとして、今度の戦争で、指導的役割を果たした多くの軍人たちが、若き日、日露戦争に参戦したことを考えると、長州閥、薩摩閥といった、派閥のもたれ合いが、責任の追求をボヤかし、精神主義で、失敗を糊塗したことが、四十年後の多くの人々を、特攻隊という美名で、犬死においやるのである。このように「坂の上の雲」は、明治時代が、以後の時代に、いかに影響を与えたかを、生き生きと教えてくれる。

本との出会い

機械工学科 松岡 一起

第二次世界大戦のあと、焦土の日本に希望をもたら

したのは並木路子の「リンゴの歌」であり、活力を与えてくれたのは水泳の古橋広之進による「世界記録ラッシュ」であった。こんな時期に私は旧制中学から新制高校に在学していた。学校から頂いた教科書というのは非常に粗末で新聞紙の大きさのざら紙に印刷されたもので、生徒たちが各自四つ折りにして本の体裁にしたものだった。こんな時代であったから、田舎の本屋には目新しい本もなく薄茶けた戦前の本が並んでいたことを記憶している。

そんな或る日、兄の机の上に置いてあった一冊の部厚い本が目にとまった。藤本武助著「応用流体力学」の本である。その当時、私は学問の深さも全然分からずに学校で勉強している数学、物理等は世の中で最先端をいくレベルの内容のものだと思っていた。何となしに頁を繰っているうちに鮮やかな「カルマンの渦列」の図があった。その前後には難しい数式が整然と並んでいる。こんな自然現象を数学的に表現できるのだろうかと疑ってみたいとなった。

少年時代のあるときには、虚栄心に駆り立てられて読んだ「人生論ノート」がある。著者、三木清の思想は何一つ分からなくて、抽象的な文章に少し慣れたのがせめてもの救いであった。こんな私であったから、文学的な素質はないものと既にあきらめてはいたが、せめて理数科には強いという自負があった。暇にまかせて始めから終わりまで目を通したが結局何も分からずじまいに終わってしまった。どうすればこの本は自分の手に届くんだ。何を勉強すれば理解できるんだと自問自答しながら数日を過ぎた過去のことが今更のようによみがえってくる。

この一冊の本との出会いが工学部へ進学する端緒にもなり、時には横道へそれる私を引き戻してくれたとも思っている。一般に本は、実用、娯楽、教養の三つに大別されるが、この本はまさに私にとっては実用のための本になってしまった。現在においても、この本は完全に理解し得ない部分が沢山ある。しかし、少年の頃に大いに刺戟を与えてくれ、また流体力学の研究への道を歩ませてくれた本としてこの「応用流体力学」こそ私の人生の伴侶になってくれた冊子である。今もって、研究や講義ノート作りの参考書として研究室に大事に置いている。

ゆとりが欲しい

電気工学科助教授 井村 栄作

「解析概論」という書名を一度は耳にしたことがあると思います。この方面の教科書としては古今の名著と云われているものである。今、始めて知った人は、これからもざっと目を通しておく価値があるでしょう。しかし、残念ながらここで述べるのはこの書物の

ことではなく、岩波文庫から出されている小冊子「数について」（デデキント著、河野伊三郎訳）のことで。この小冊子—これも名著—実は上記の解析概論と密接な関係を持っているのですが、そのことを私が知ったのは約17年前のことでした。

私も当時は諸君と同様に技術者の卵になるべく、微分や積分などに追いまわされていました。だいたいにおいて私達のような工学的立場からすれば、自由に微積分の公式が駆使できたり、関連の公式や定理がどこに載っているかさえわかれば充分であるとよく言われます。つまり教える側も聴く側もどちらかと言えばそのよって来る由縁よりもむしろ解法のテクニクに重点を置いていて、これは今も昔も同じように思います。しかるに本小冊子はそのようなあいまいな態度を完全に否定します。読み終って少くとも私自身は、反省を求められたような気がしました。本書の内容ときたら「数の連続性」と「数とは何か何であるべきか」とにつきており、興味のない人が読もうとしても最初から読む気がしないか、読んだとしても何とくだらない事柄に時間を浪費したものだという程度の感想を持つことでしょう。それにもかかわらず、一夏の間この本が私を引きづり込んだものは何だったのか。思うに著者の発想が斬新で初学者にもなんとなく理解でき、しかも一点の疑々も許さぬ厳正な態度と真摯な魂とがこめられているように感じたからです。一点の疑々も許さぬ厳しい態度—これこそは科学する人の最低の条件ではないでしょうか。著者の信条である「証明できることは科学において証明なしに信頼すべきでない」という主張が鋭く胸を打つ。このような信条の持主だったからこそ、単純でその説明の必要が無いような「数の連続性」などに多大の時間と労力とを捧げることができたのかと羨らやましい限りでした。

ややもすれば現代の私達特に工学に従事する者はあまり深く考えることなく、小手先の技に満足しがちである。これも時代の流れ、分野の相異と割切ってしまうえば身も蓋もないが、私達はもう少し余裕をもってじっくりと思考してもよいのではないか。デデキントの生きた時代（1831～1916）が今よりもはるかに住み良かったわけでもありません。17年経過した今も本書についての私の印象は不変です。

寄贈図書について

昨年度、故島内一郎教授、及び、徳田精講師から多数の雑誌・書籍を御寄贈頂きました。既に整本、整理されて閲覧室に配架いたしました。せいぜい御利用下さい。

新 着 図 書 案 内

〈総 記〉

- ちくま少年図書館 筑摩
 44：学級物語 斎藤 喜博
 原色図解大辞典 小学館
 5：人間と機械
 人類の知的遺産 講談社
 25：王陽明
 35：スピノザ
 43：カント
 国立国会図書館所蔵欧文雑誌目録 紀伊国屋
 雑誌新聞総かたろぐ 1980年版
 メディア・リサーチ・センター

〈哲 学・宗 教〉

- 愛と意志 R. May 誠信書房
 甘えの構造 土居 健郎 弘文堂
 キリスト教の精神とその運命 ヘーゲル 現代思想社
 学問のすすめ 大河内 一男 筑摩
 現代倫理学、その系譜と課題 池長 澄 杉山書店
 生きがいについて 神谷 美恵子 みすず
 生きられる時間 1・2 E. Minkowski みすず
 位相人間学 阿部 彦四郎 S. P. P
 状況倫理の可能性 小原 信 中公
 カントの実践哲学 安倍 能成 勁草書房
 苦悩の存在論 V. Frankl 新泉社
 狂気の価値 西丸 四方 朝日新聞社
 密教の文化 金岡 秀友 春秋社
 人間の問題 J. Dewey 明治図書
 人間をみつめて 神谷 美恵子 朝日新聞社
 NTD新約聖書註解 別巻 J. Schniewind 同刊行会
 プラトンの学園アカデメイア 広川 洋一 岩波
 霊と肉 山折 哲雄 東京大学
 理念と形姿 E. Cassirer 三修社
 世界の聖域 講談社
 6：ガンジスの聖域
 神秘学講義 高橋 巖 角川
 神秘学序説 高橋 巖 イザラ書房
 心霊世界の神秘 宝来 勇四郎 共栄書房
 心理学のすすめ 波多野 完治 筑摩
 心理禅、東洋の知恵と西洋の科学 佐藤 幸治 創元社
 創造性開発の研究 恩田 彰 恒星社厚生閣
 魂にメスはいらぬ 河合 雄 朝日出版社
 手—その知恵と性格 橋 覚勝 誠信書房
 哲学に何ができるか 広松 涉 朝日出版社
 哲学のすすめ 梅原 猛 筑摩
 絶望の形而上学 B. Meerpohl 東海大学

〈歴 史・地 理〉

- ドイツとドイツ人 加藤 雅彦 日本放送出版協会
 現代ドイツ人気質 大沢 一爽 時事通信社
 古墳の旅 森 浩一 芸艸堂
 京阪神市街地図集：奈良・滋賀 '80 大阪人文社
 教育社歴史新書 教育社
 1：古代の東アジアと日本 佐伯 有清
 2：大和の政権 水野 祐
 3：古代末期の反乱 林 陸朗
 4：摂関政治 阿部 猛
 5：辺境の争乱 庄司 浩
 6：東大寺 平岡 定海
 7：平泉 高橋 富雄
 8：熊襲と人 井上 辰雄
 9：古事記の世界 川副 武胤
 10：受領 森田 弟
 11：後宮と女官 野村 忠夫
 12：万葉集の時代 渡辺 守順
 13：辺境 高橋 富雄
 51：鎌倉開府と源頼朝 安田 元久
 52：鎌倉文化 川添 昭二
 53：荘園の人々 工藤 敬二
 54：中世の九州 外山 幹夫
 55：戦国大名 小和田 哲男
 56：鎌倉執権政治 安田 久
 81：茶の湯 熊倉 功夫
 82：川柳・狂歌 浜田 義一郎
 83：米将軍とその時代 土肥 鑑高
 84：地方 人 塚本 学
 85：百姓一揆と義民伝承 横山 十四男
 86：キリシタン大名 岡田 章雄
 87：藩校と寺小屋 石川 松太郎
 88：江戸時代の上方町人 作道 洋太郎
 89：吉原・島原 小野 武雄
 90：東北戦争 山田 野理夫
 111：殖産興業 田村 貞夫
 112：八幡製鉄所 小林 正彬
 113：神仏分離 圭室 文雄
 115：成金時代 梅津 和郎
 116：明治のむら 大島 美津子
 118：昭和経済史 相蕨 完一
 119：豪農 伝田 功
 120：朝鮮戦争 村上 薫
 121：日本保守党小史 村川 一郎
 122：財閥解体 梅津 和郎
 123：日本財閥史 森川 英正
 124：天皇の軍隊 大浜 徹也

125:三井財閥史 梅井 義雄
 126:三菱財閥史 三島 康雄
 128:住友財閥史 作道 洋太郎
 171:法然と浄土宗教団 大橋 俊雄
 172:一遍と時宗教団
 173:最澄と天台教団 大内 堯央
 174:修験道 宮家 準
 175:近世往生伝の世界 笠原 一男
 176:時間の思想 永藤 靖

南北朝遺文 九州編第一巻 瀬野 精一郎 東京堂出版
 南都七大寺の歴史と年表 太田 博太郎 岩波
 日本の苗字 表記編・表音編 日本経済新聞社
 日本の山河 国書刊行会
 9:高知 天と地の旅
 日本史小百科 近藤出版社
 9:遊女 西山 松之助
 15:学校 海原 徹
 日本史用語辞典 同編集委員会編 柏書房
 聖書時代の生活 左近 義慈 創元社
 丹羽保次郎 人と業績 丹羽記念館編 丹羽記念館
 天理市史 天理市教育委員会
 4・5 巻:史料編
 東京大空襲 戦災史 東京空襲を記録する会 講談社
 図説 日本文化の歴史 小学館
 5:鎌倉

<社会科学>

文明の生態史観 梅棹 忠夫 中公
 カスパー・ハウザー A.V. Feuerbach 福村出版
 大日本年中行事大会 儀礼文化研究所 桜楓社
 デサナ;アマゾンの性と宗教のシンボリズム
 R. Reichel-Dolmatoff 岩波
 現代日本の公害と社会福祉 宮城 まり子 風媒社
 母よ嘆くなかれ P.S. Buck 法政大学
 ヘレン・ケラーはどう教育されたか
 A. Salivan 明治図書
 比較文化への視角 加藤 秀俊 中公
 被差別部落の間ばなし 小林 初枝 筑摩
 日立プラント建設株式会社 1 同社
 人を活かす経営 松下 幸之助 PHP
 遺伝と環境、野性児からの考察 R.M. Zingg 福村出版
 岩波講座子どもの発達と教育 岩波
 5:少年期発達段階と教育 2 石田 和男
 6:青年期発達段階と教育 3 小川 利男

海外移住の意義を求めて 外務省
 決断 黒田 章之助 大阪新聞社
 心の社会・日本 L. Stuki サイマル
 ことばと人間 S. I. ハヤカワ 紀伊之国屋
 教育学を学ぶ 柴田 義松 有斐閣
 教育に生きて 金沢 嘉市 毎日新聞社
 教育は死なず 正・続 若林 繁太 労働旬報社
 講座現代の高校教育1~6 田代 三良 草土文化

ライオン油脂六十年史 同社
 日本博士学位論文索引(工学編) 日本プランニング
 日本近代教育史 同刊行会 講談社
 日本の礼法 小笠原 清信 講談社
 逃げる裁判官 青木 英五郎 社会思想社
 歴史と国家 永井 道雄 中公
 制度と情念と 中村 雄二郎 中公
 世界の民族 平凡社

9:アフリカ南部・マダガスカル

社会形成の経験と概念 平田 清昭 岩波
 しじみ貝の詩 岩淵 紀雄 日本放送出版協会
 たった一度の女の人生 樋口 恵子 海童社
 わたしたちのトビアス C. Svedberg 偕成社
 野性児・その神話と真実 L. Malson 福村出版
 図説 明治百年の児童史 上・下 唐沢 富太郎 講談社

<芸術>

ベートーヴェン、人と芸術 芸術現代社
 エジプトの秘宝 3 講談社
 3:トウト・アंक・アメン I
 フルトウエングラー、生涯と芸術 音楽之友社
 現代日本美術全集 座右宝刊行会 集英社
 17:中村 彝/須田 国太郎
 現代日本画家素描集 日本放送出版協会
 1:杉山 寧
 2:平山 郁夫
 3:森田 曠平
 4:堅山 南風
 5:東山 魁夷
 6:加山 又造
 7:高山 辰雄
 8:奥村 土牛
 9:上村 松篁
 10:山口 華楊

現代の演奏 吉田 秀和 新潮社
 現代世界美術全集 愛蔵普及版 集英社
 19:コロ／ミレー／クールベ
 20:ピサロ／シスレー／スーラ
 24:アングル／ドラクロア

現代日本の美術 小学館
 17:建築 神代 雄一郎
 俳人の書画美術 座右宝刊行会 集英社
 8:漱石
 9:碧梧桐

近代日本の美術と文学 匠 秀夫 木耳社
 奈良六大寺大観 同刊行会 岩波
 3:法隆寺(三)

日本美術全集 学習研究社
 14:禅宗の美術 墨跡と禅宗絵画
 25:近代絵画の黎明 文晁/華山と洋風画

日本映画俳優全集・男優編 キネマ旬報社
 日本の民家 向井 潤吉 保育社

日本と西洋、美術における対話 山田 智三郎 講談社
音楽中辞典 浅香 淳 音楽之友社
ピカソ—沈黙のアトリエ D. D. Dancan 講談社
世界美術全集 座右宝刊行会 集英社

16: プッサン

18: ターナー (Turner)

写真集東山魁夷の世界 同編集部 集英社

全集美術のなかの裸婦 座右宝刊行会 集英社

3: 神話、神々をめぐる女たち

9: 風俗と女たち

<体 育>

高校駅伝30年 大田 博邦 講談社

日本アマチュアスポーツ年鑑 '77 ぎょうせい

図説テニス事典 福田 雅之助 講談社

<語 学>

Deutsch 2000 1 Max Hueber

Deutsch 2000 2 Max Hueber

Duden Biblio. Inst.

英語からドイツ語へ 藤田 五郎 第三書房

エスペラント四週間 大島 義夫 大学書林

英語の語用論 毛利 可信 大修館

現代作家シリーズ 1~74巻 南雲堂

新修平仄字典 林 古溪 明治書院

初級クラスのドイツ語 石渡 均 郁文堂

関口 初級ドイツ語講座 関口 存男 三修社

<日 本 文 学>

アクロポリスの丘に立って 呉 茂一 新潮社

あふれる愛の中で 松本 寛二 創元社

アルゴノオト あおいの日記 井亀あおい 葦書房

光と影の国で 永井 智雄 新日本出版

イエスの生涯 遠藤 周作 新潮社

季寄せ 草木花 (秋・上下、冬) 朝日新聞社

幻の光 宮本 輝 新潮社

森鷗外の医学と文学 宮本 忍 勁草書房

日本の伝説 角川

38: 佐賀の伝説

39: 紀州の伝説

にんげん百科事典 青木 雨彦 講談社

汚名「九大生体解剖事件」の真相 東野 利夫 文芸春秋

パパは生きている 安井 信朗 風媒社

リングはぼくの戦場だ 具志堅 用高 講談社

青春高原 仁科 美紀 白玉書房

青春の門(墮落論、望郷編 下) 五木 寛之 講談社

死線を越えて 賀川 豊彦 キリスト新聞社

昭和万葉集 講談社

9: 昭和25~26年

10: 昭和27~29年

太陽の子 灰谷 健次郎 理論社

東京自転車小旅行 小林 泰彦 文芸春秋

兎の眼 灰谷 健次郎 理論社

図説日本の古典 集英社

8: 今昔物語

<外 国 文 学>

アウシュヴィッツ収容所 R. Hess サイマル

文明批評とイデオロギー T. Eagleton 岩波

ドイツ文学史、原初から現代まで F. Martini 三修社

ドイツ文学の歴史 H. J. Geerdts 学苑社

ゲーテ全集 1~12 人文書院

ギリシア喜劇全集 I、II 人文書院

ヘルマン・ヘッセ、危機の詩人 高橋 健二 新潮社

オルダス・ハックスレイの長編小説研究

松島 健 増進堂

シェイクスピア辞典 倉橋 健 東京堂出版

The Merchant of Venice シェイクスピア Decca

シェイクスピア全集 1~8 筑摩

指輪物語 1~6巻 J. R. R. Tolkien 評論社

<文庫・新書>

発狂した宇宙 F. Brawn 早川書房

狂気の沙汰も金次第 筒井 康隆 新潮社

七瀬ふたたび 筒井 康隆 新潮社

2001年宇宙の旅 A. C. Clarke 早川書房

2095年の少年 横田 順弥 新潮社

ソラリスの陽のもとに S. Lem 早川書房

やつあたりの文化論 筒井 康隆 新潮社

幼年期の終り A. C. Clarke 早川書房

<カセット・レコード>

アリス/アリス I-VII 東芝EMI

ジェームス・ラスト/ベスト・オヴ・ジェームス

ラスト全曲集 ポリドール

ジェームス・ラスト/ラテン/ラテン/ラテン/

ポリドール

ジェームス・ラスト/ノンストップ・ディスコ

・ダンシング ポリドール

ジェームス・ラスト/James Last in Russia

ポリドール

アリス/アリス Best Selection. 東芝EMI

サーカス/サーカス・ブティック Alfa

モーツァルト/モーツァルト名曲全集 中公

The Great Hitmakers 1~4 CBS/SONY

1: エアロスミス、ジェフ・ベック、ブラッド・他

2: ウェット・アンド・ティアーズ他

3: レッド・ツェッペリン、ロギンズ&メッシーナ他

4: サンタナ、サイモンとガーファンクル他

スクリーン、ミュージック キング

<工 学 共 通>

石白の謎 みわしげお 産業技術センター

偏微分方程式の有限要素法

A. R. Mitchell 科学技術出版

高速フーリエ変換 E. C. Bringham
 工学のための初等ラプラス変換 村田 愛祐 オーム社
 発明とアイデアの歴史 エドワード・デ・ボノ 講談社
 工学のための数理解析 I・II 富田 幸雄 実教出版
 詳解物理応用数学演習 後藤 憲一 共立出版
 演習機械振動学 入江 敏博 朝倉書店
 熱応力 竹内 洋一郎 日新出版
 不可逆過程の熱力学序論 妹尾 学 東京化学同人
 材料力学 中巻 湯浅 亀一 コロナ社
 第16回X線材料強度に関する討論会 日本材料学会
 わかる材料力学演習 竹内 洋一郎 日新出版
 材料力学大要 水野 正夫 養賢堂
 材料力学I II 渥美 光 森北出版
 材料力学 西田 まさ孝 森北出版
 新選材料力学演習 大久保 肇 養賢堂
 材料力学 上下巻 中原 一郎 養賢堂
 材料力学明解 吉識 雅夫 養賢堂
 強度設計データブック 同編集委員会 裳華房
 応力集中 西田 正孝 森北出版
 塑性学 工藤 英明 森北出版
 光弾性実験法 辻 二郎 日刊工業新聞社
 塑性力学の基礎 北川 浩 日刊工業新聞社
 弾性力学の基礎 井上 達雄 日刊工業新聞社
 弾性および材料力学 樋口 盛一 養賢堂
 わかる弾性学 竹内 洋一郎 日新出版
 レオロジー入門 岡 小天 工業調査会
 金属の強度と破壊 黒木 剛四郎 森北出版
 金属材料 河合・大和久 共立出版
 基礎金属材料 渡辺 慈朗 共立出版
 非破壊検査 富士 岳 新技術開発センター
 太陽エネルギー読本 日本太陽エネルギー学会 オーム社
 品質管理入門 依田 浩 朝倉書房
 総合エネルギー講座 エネルギー変換懇話会 オーム社
 シグナルフローグラフ入門 J. R. Ward コロナ社
 状態変数解析入門 J. R. Ward コロナ社
 基本マイクロコンピュータ Arpad Banna 培風館
 制御工学 明石 一 共立出版
 MELCOM9100 説明書 三菱電機
 計算機の歴史 H. H. Goldstire 共立出版
 BASICで広がる世界 柏木 恭忠 CQ出版
 コンピュータ犯罪 D. B. Parker 秀閣社
 解説 工作機械の自動制御 望月 伝 産報
 自動制御 山田 泰 朝倉書店
 労働災害防止関係法令集 労働省 労務行政研究所
 図学 新版 大久保 正夫 日刊工業
 制御原理 有本 卓 共立出版
 電子制御工学 近藤 文治 コロナ社
 遠方監視制御 中島 吉雄 オーム社
 大学課程制御工学 近藤 文治 オーム社
 自動制御 古賀 豊城 朝倉書店
 新制自動制御 牧野 秀雄 オーム社

図解・自動制御の理論と実際 加藤 一郎 電気書院
 例題演習 自動制御入門 若山 伊三雄 産業図書
 自動制御理論 福島 弘毅 近代化学社
 技術文献調査資料 署名及び手書き文字の

パターン認識とOCR研究 P T I S
 アルゴリズム+データ構造 日本コンピ
 =プログラム N. Wirth ュータ協会
 上級情報処理技術者育成指針 コンピュータ・エゴ社
 コンピュータのことがわかる本

西田 修 日本実業出版
 技術論文の書き方 T. G. Hicks 近代科学社
 エンジニアリング・サイエンス講座 共立出版

1: 工学と独創 川上 正光
 3: 感覚と工学 樋渡 涓二
 13: 流れと熱の工学 I 森 康夫
 14: 流れと熱の工学 II 森 康夫
 29: エネルギー変換の工学 森 康夫

第13回日本道路会議論文(昭和54年) 日本道路会議
 公害日本列島 福島 菊次郎 三一書房
 公害の年次報告書(昭和54年) 奈良県
 市民参加 篠原 一 岩波書店
 信濃川百年史 北陸地方建設局 北陸建設弘済会
 写真集水保 W. E. Smith 三一書房
 文化財と建設史 関根 克 鹿島出版
 住宅と宮殿 Le Corbusie 鹿島出版
 建築電気設備設計データブック 船津 弘治 日刊工業
 日本の近代建築 上・下 稲垣 栄三 鹿島出版

<機械工学>

学術用語集 文部省 日本機械学会
 原子力工学 大山 彰 オーム社
 歯車規格集 日本歯車工業会
 自動車工学1-2 関 敏郎 コロナ社
 解説サーボ機構とその要素 渡辺 洋 オーム社
 機械設計製図法 設計製図研究会 森北出版
 航空宇宙工学概論 三木 鉄夫 森北出版
 ユーザー・ハンドブック80 日本自動車連盟
 油圧操作と潤滑油装置 田中 暢雄 電気書院
 豊かな生活を支えねば 牧野 茂 日本発条株式会社

<電気工学>

電気技術大系 1-18 電気書院
 大学課程電気機器 (1)(2) 林 千博 オーム社
 大学課程過渡現象 大槻 喬 オーム社
 大学課程計測工学 土屋 喜一 オーム社
 大学課程送配電工学 高 周平 オーム社
 大学演習回路 高橋 秀俊 裳華房
 だれにもわかる電気接続図読本 田中 隆明 オーム社
 電磁気計測 西野 治 電気学会
 電験第3種模範解答集(昭和55年) 電気書院
 電気回路演習 伊丹 潔 海文堂
 電気回路演習と解法 I 赤尾 保男 広川書店

電気回路計算法	早田 保実	森北出版	過渡現象演習	加藤 一郎	学献社
電気回路と問題解法	河内 淳	理工学社	基礎電気機器	徳田 精	国民科学社
電気回路網と接続理論	小野寺 力男	森北出版	基礎電気回路 I・II	川上 正光	コロナ社
電気機械 上下	大隅 菊次郎	共立出版	基礎電気回路例題演習	川上 正光	コロナ社
電気機器概論	堀井 武夫	コロナ社	基礎電気計測	三浦 良一	朝倉書店
電気機器学 (1)	山下 英男	コロナ社	国際電気通信関係法制の研究		国際電信電話KK
電気機械工学	天野 寛徳	電気学会	国際電信電話株式会社・二十五年		国際電信電話KK
電気機械工学 2	福島 弘毅	朝倉書店	交流理論	小郷 寛	電気書院
電気機器設計学	竹内 寿太郎	オーム社	交流理論	本多 波雄	朝倉書店
電気機器テンソル解析	竹内 寿太郎	オーム社	高電圧工学 I・II		電気学会
電気工学概論	山本 勇	森北出版	ラプラス変換と電気回路	川村 雅恭	昭晃堂
電気工学概論	福島 弘毅	朝倉書店	リニアモータと応用技術	山田 一	実教出版
電気工学ハンドブック 1967		電気学会	Matrix theory of electrical machinery		
電気工学ハンドブック 1967		電気学会		竹内 寿太郎	オーム社
電気工学基礎実験	岩堀 恭三	コロナ社	マトリックスとその応用	西垣 久実	コロナ社
電気工事士、完全合格試験問題と解答集		新星出版社	入門電気計測	西野 治	実教出版
電気制御機器応用ガイドブック		日刊工業	日本電気最近十年史		日本電気
電気応用 1・2	深尾 保	コロナ社	パルス回路の設計	猪飼 国夫	CQ出版
電気応用 1・2		電気学会	Principles of servomechanisms		
電気応用	池田 市寿	東京電機大学		G. S. Brown	John Wiley
電気応用 I II	高野 知彦	朝倉書店	パルスとデジタル回路	山本 外史	理工学社
電機制御通論	小川 信一	コロナ社	最新電験ハンドブック		電気書院
電気鉄道	稲田 金次郎	コロナ社	最新電気鉄道	桂田 徳勝	電気書院
電気鉄道工学演習	宮下 一雄	学献社	最新電力用機器	武藤 三郎	森北出版
電気材料	田中 哲郎	オーム社	三相整流子電動機論	竹内 寿太郎	オーム社
電子実験	世良 進	コロナ社	産業電動機応用工学	坪島 茂彦	オーム社
電子回路	石井 正博	理工学社	制御と振動の数学	布川 昊	コロナ社
電子工学	牧野 秀雄	オーム社	整流子電機大学講義	竹内 寿太郎	オーム社
電子工学要論	浮田 勇	国民科学社	専門講座 送配電	前川 幸一郎	東京電機大学
電子工学基礎実験	関口 利男	コロナ社	静止電力変換装置	池田 吉	電気学会
電子工学実験	電気通信学会	コロナ社	精解演習ベクトル演習	宇田川 銈久	広川書店
電子応用計測	美咲 隆吉	学献社	真空管回路入門	池田 淳一	電気書院
電気および電子回路	徳田 精	国民科学社	初歩の電気工学	沢 莊平	理工学社
電灯照明・電熱	伊藤 義男	オーム社	照明工学		電気学会
電灯照明	関 重広	東京電気大学			
電灯照明工学	関 重広	東京電気大学			
演算子法と過渡現象	林 重憲	国民科学社			
現場で役立つ電子技術百科	北大路 剛	オーム社			
半導体回路	宮脇 一男	電気書院			
発電工学	山村 豊	コロナ社			
非同期機実験回路理論	竹内 寿太郎	オーム社			
非線形回路演習	武藤 三郎	朝倉書店			
保護継電器とその適用	巽 良和	学献社			
インバータ回路	B. D. Bedford	コロナ社			
インバータ・コンバータ		日刊工業			
磁気増幅器読本	茂木 晃	オーム社			
弱電流実験工学	徳田 精	国民科学社			
回路論	喜安 善市	朝倉書店			
回路解析論	斎藤 正男	コロナ社			
解説アナログ電子計算機	市川 真人	朝倉書店			
解説電子回路 上・下	久保 重美	近代化学社			
家庭電機工学概論		電気学会			

以下次号へ

(編集後記)

第7号を発行しますが、今号から編集責任者が変わりました。引継等のため、発行がおくれたことをお詫び致します。(T)